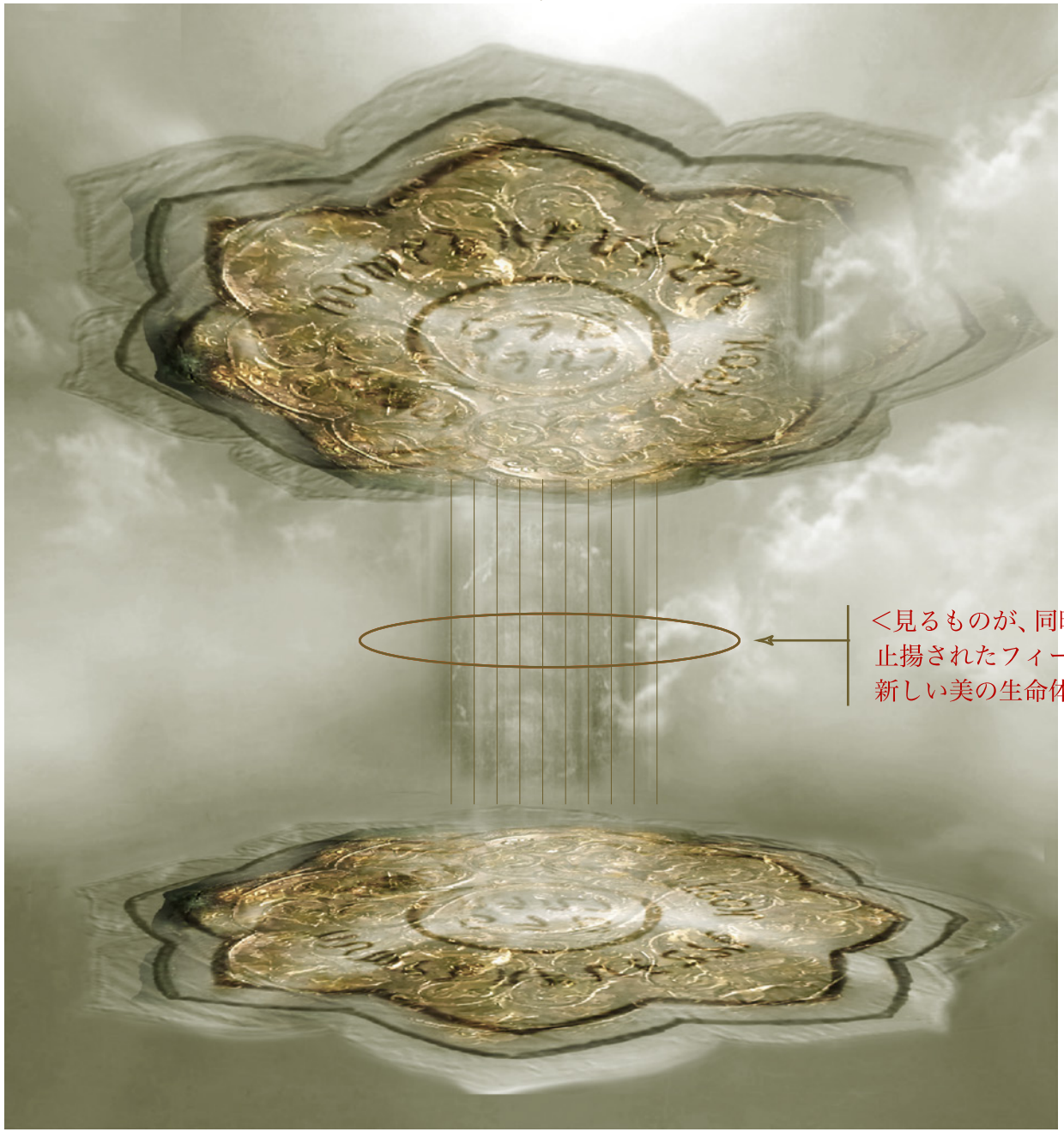
八咫の鏡　＜日本という超空間＞へ

＜八咫の鏡 A＞



＜八咫の鏡 A’＞

「見るものが、同時に見られるものになった」*[1]高次の花。
それが「八咫の鏡の合わせ鏡の秘儀」*[2]、
日本だ。

*八咫の鏡Digital image　*中央はキリストの聖骸布　*背景は伊勢・伊雑宮の神事の時に現れた光繧

*[1] [2] : 三島由紀夫「文化防衛論」より抽象

__空は いつも呟いている__

対になった「八咫の鏡」(＝対の「モーセの石板」)
の合わせ鏡の中空では、空がこんなことを呟いているような気がする.
(このブランショの死の空間の中では、極限の希望である言葉の死の空間の中では,
未来の、静かな共同体生命への曙を感じ取れる。
そこはまさに半田広宣さんのシリウス意識体からの享受であるところの、
”反転し、全てが＜あなた＞となった世界”の描写だ。) ___*koike*

2018 9.24

_____「今では何がわたしたちの外にあるのか？」____「だれひとり」____

「だれが遠いもので、だれが近いものなのか？」____

「ここにいるわたしたちとあそこにいるわたしたち」____

「ではだれがわたしたちのほうにやってくるのか？待っているのか？」____

「私たち。」____「ではあの太陽はどこから光りを得ているのか？」____

「私たちだけから。」_____「では空は、いったいなになのか？」____

「わたしたちの中に在る孤独。」_____

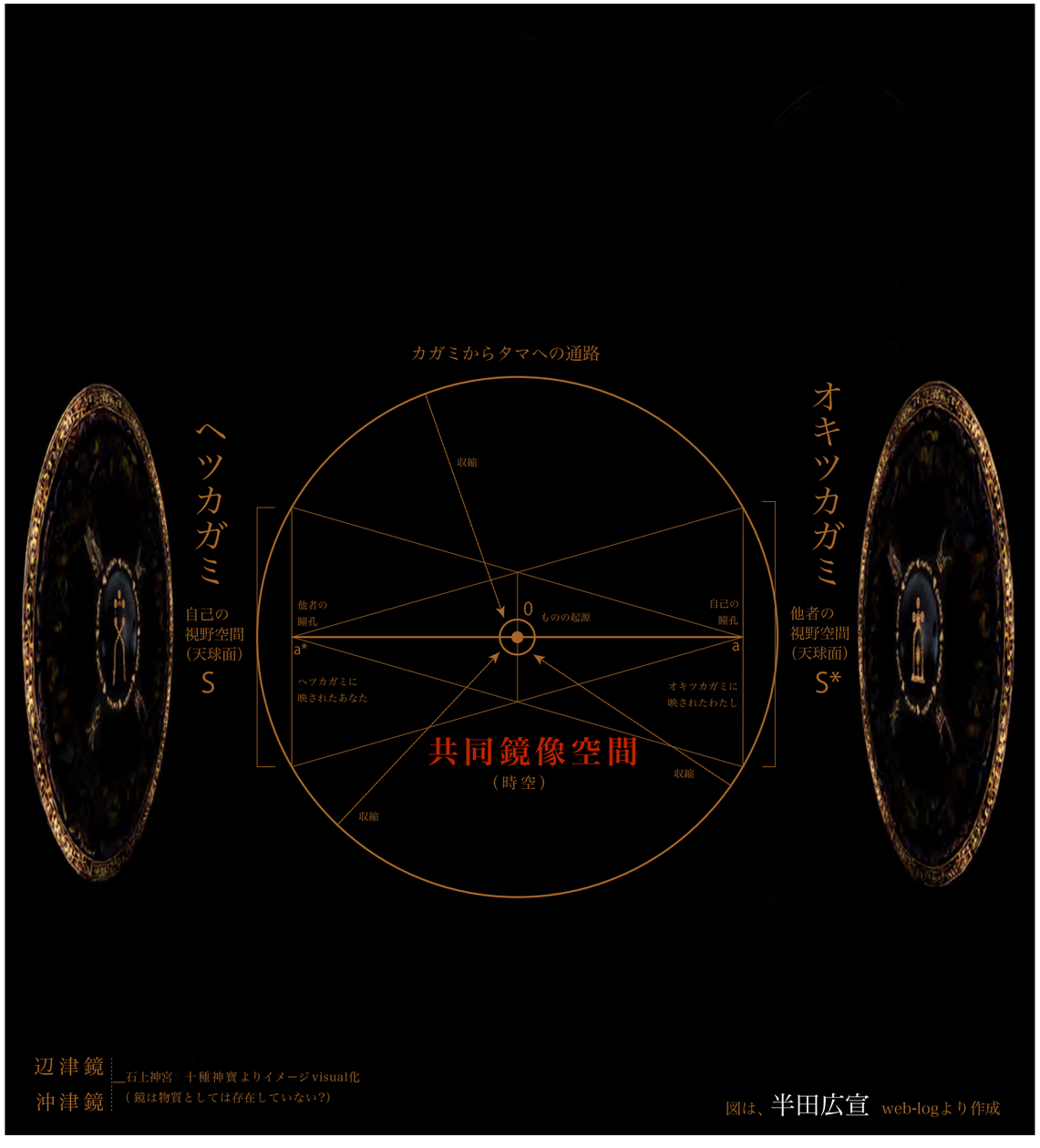
「ではそもそもだれが愛されるべきなのか？。」_____

_____「私だ。」

Mauris Blanchot モーリス・ブランショ「至高者」

三島由紀夫の双対の鏡__八咫の鏡の反転空間＝”みやび”（神人・超人）

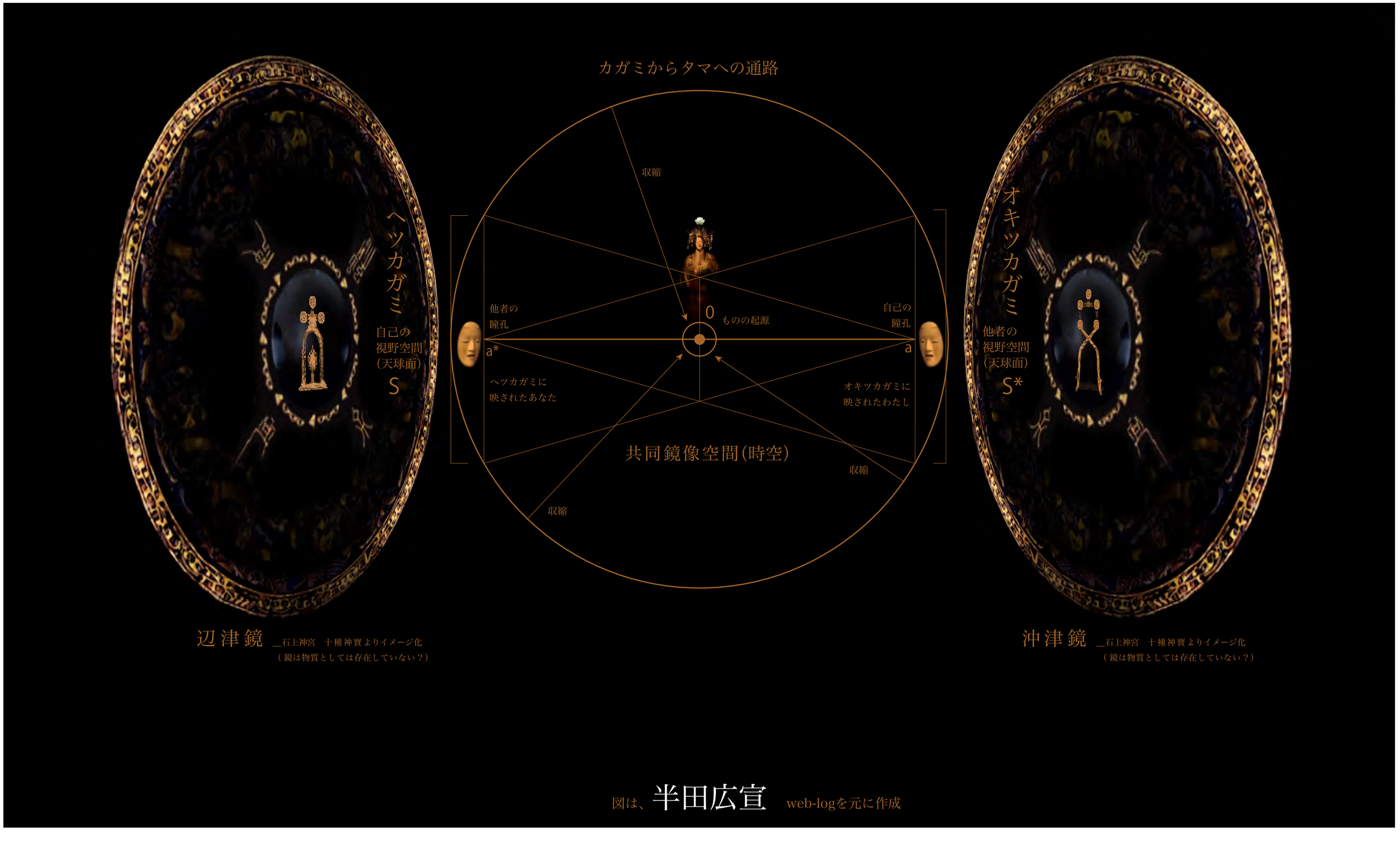
半田広宣の双対の鏡__石上神宮の オキツカガミ と ヘツカガミの反転空間＝変換人（人神）



＿沖津鏡と辺津鏡の合わせ鏡のデバイスによる秘儀＿

＜見るもの＞が 同時に＜見返される＞ものに＿高次の美

三島由紀夫＿八咫の鏡の秘儀

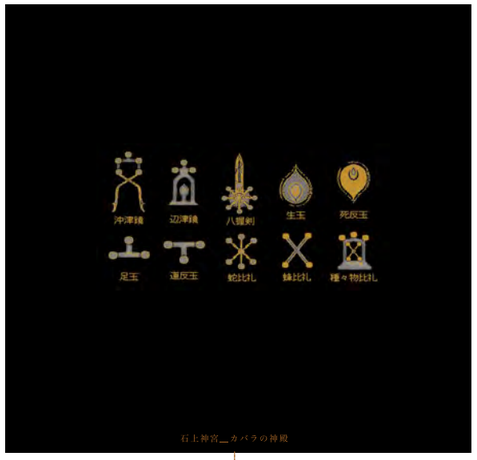


辺津鏡 ＿石上神宮　十種神寶よりイメージ化
（鏡は物質としては存在していない？）

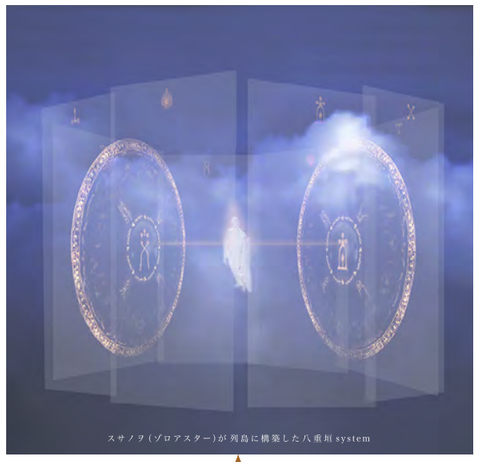
沖津鏡 ＿石上神宮　十種神寶よりイメージ化
（鏡は物質としては存在していない？）

図は、半田広宣　web-logを元に作成

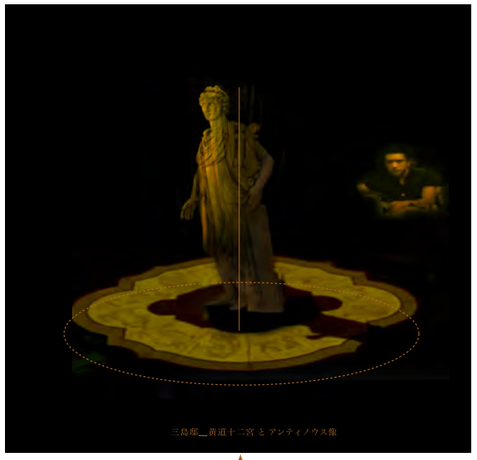
日本は、八重（ヤエ）の國

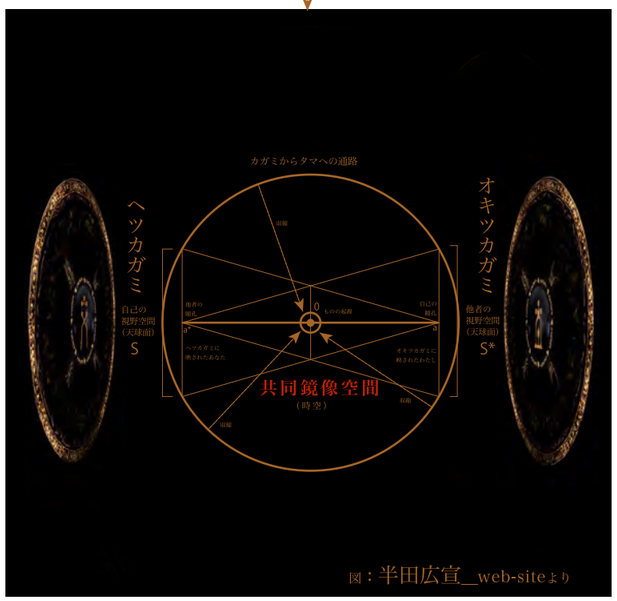


石上神宮＿カバラの神殿


スサノヲ（ゾロアスター）が列島に構築した八重垣system

日本という空虚（空っぽ）の中で発動する三種の神器デバイス


三島鳥居＿黄道十二宮とアンティノウス像



八咫の鏡 image ....koike作成

image ....koike

十種神寶 石上神宮 [オキツカガミ][ヘツカガミ]

八重垣システム

八咫の鏡システム

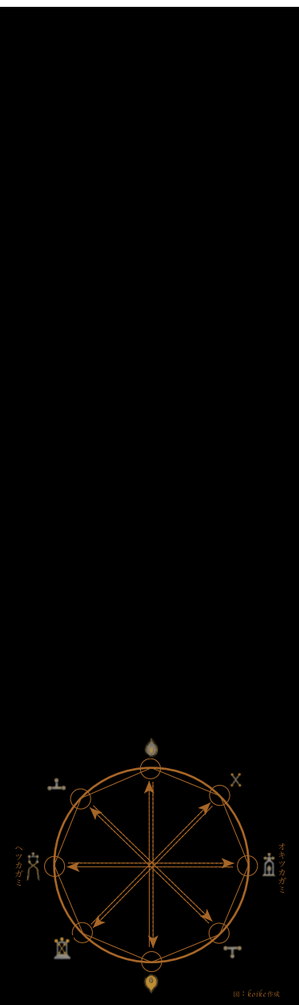
八咫の鏡 / 磐座 / u.f.o.(rama) markaba

日本人は、宇宙最奥の”生命の樹”に繋がる歩廊をまだ遺している

日本人は、古代王朝和歌の内部に、神に繋がる歩廊をまだ遺している

そして不思議なことに、宇宙根源の生成原理＿カタカムナの中央にある原器も、この円に八の玉を持つ図形。
そこから発生する記号言語は、音韻も持ち、カタカムナの「和歌」を謳っている。
ちょうど生命の樹も八の音階で歌を謳っているように。万象は揺らめき摂動しながら謳っている。空間量子の海。

*[空間量子].....カルロ・ロヴェッリ。井口和基ブログより。素領域と近似概念と。



八重垣システム

石上神宮
「十種の神寶」の中心柱＿”八握剣”
kabbara（均衡の柱）

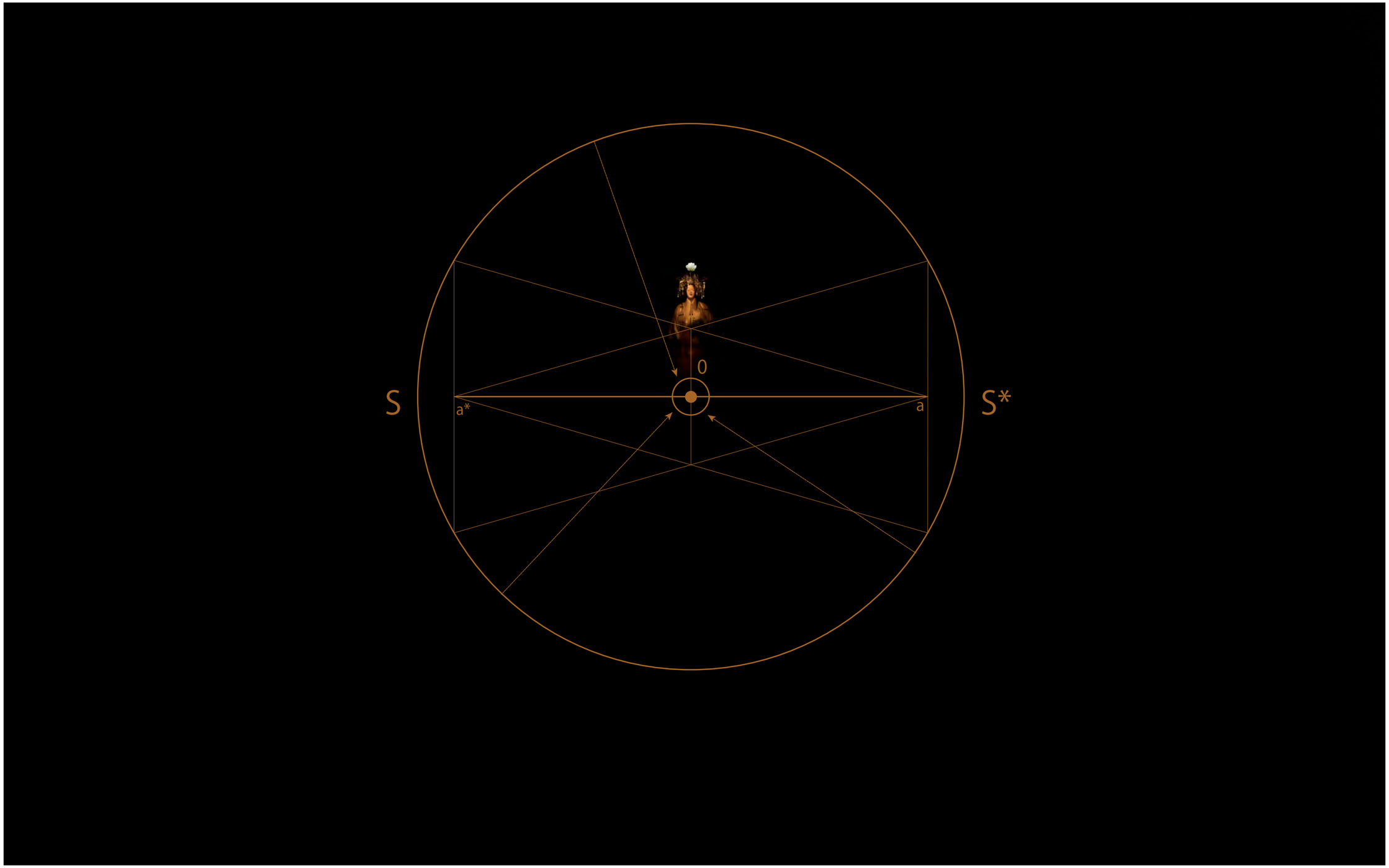
励起する”*tama*”

十種の神寶 *system*
=
八重垣 *system*
=
三種の神器 *system*
=
八咫の鏡 *system*
=
生命の樹 *system*

image ....*koike* 作成

死んだ仏典概念を捨てて
＿三島由紀夫と半田広宣の合わせ鏡による秘儀は、生きた未来生命体へと向かうべき＿

事事無礙という来るべき共同生命体空間へ



神に繋がる歩廊を遺した和歌の花影・棟方志功の雑華の華厳・南方粘菌の生命体
ル・クレジオの無礙の鳥と風と海・源氏物語の不羈の優雅・ドゥルーズの

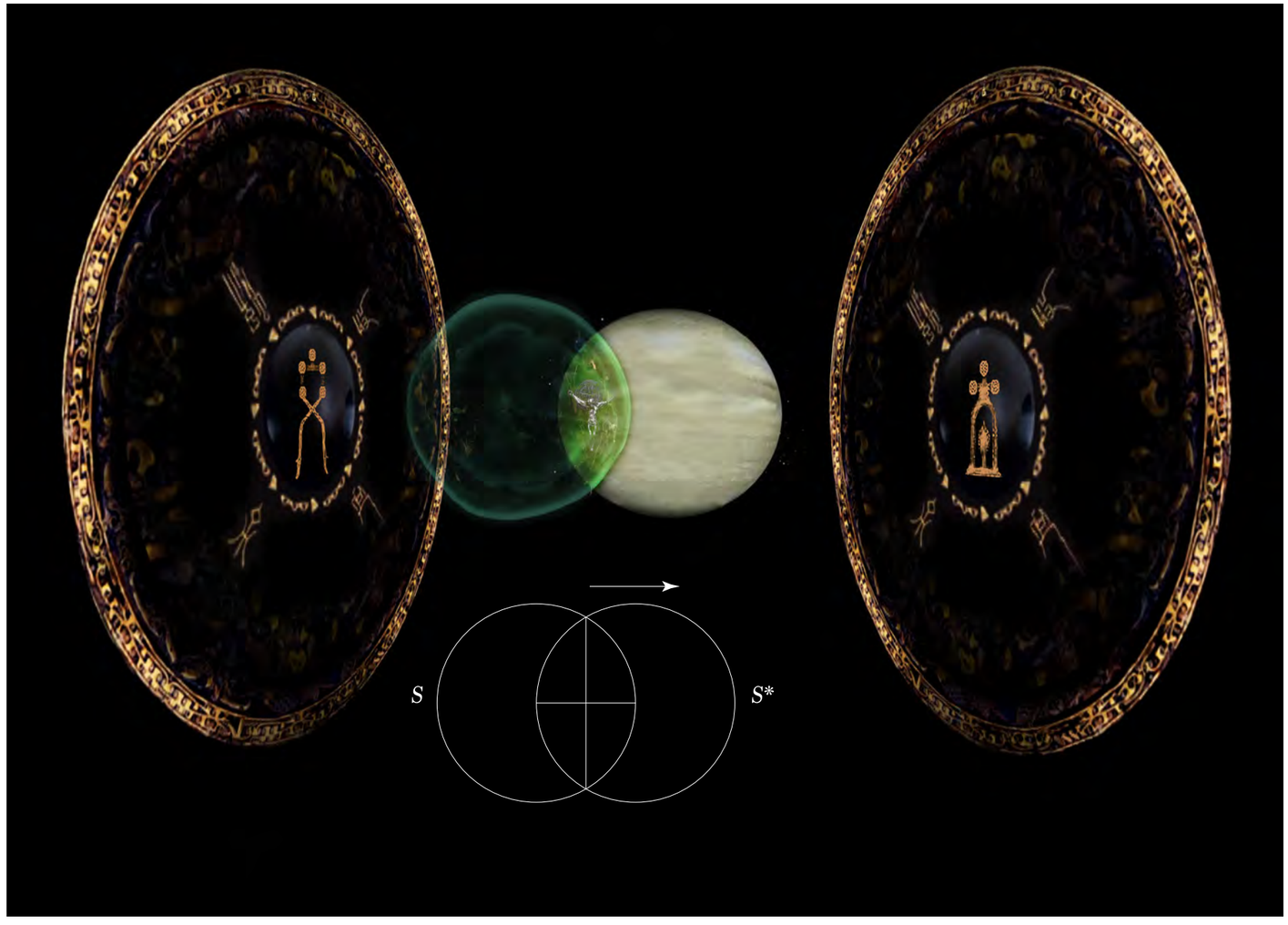
ドゴン族に降りた魚の形の神たち。

「自己」と、「他者の流出」との重なりの領域は、”魚のカタチ”、

そこに幾何学のイエスキリストが出現する。美しい闇。

高次の美によって超人となった新しい子供たち

Un beau ténébreux ジュリアン・グラック
ヴェシカパイシスは幾何学としてのイエス・産出のVAGINA(闇)



世界は ただ 美的対象としてしか存在しない

___F.ニーチェ___

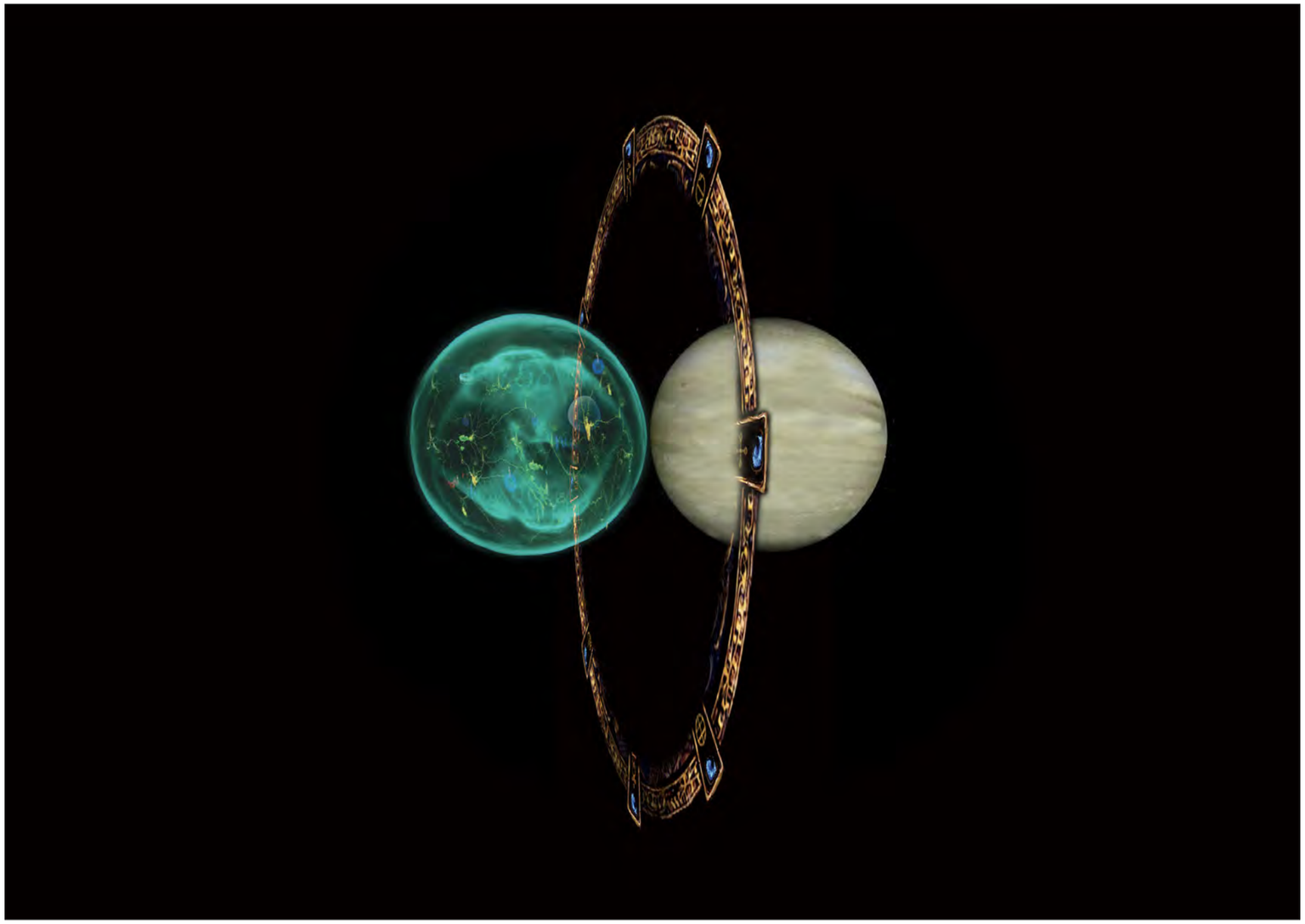
三島由紀夫は１５歳の頃
ニーチェ（＝ゾロアスター）を
読んだ時に、
三島の意識の中では即座に、
日本の女流王朝心理文学に連結された。

この時から三島由紀夫の中で
宇宙は二つ存在を始めた。

王朝女流のその宇宙的寂寥に。
夜は深くても薔薇は存在しなければならない。
それは純粋持続の美とエチカの空間。
古今の形而上学＝言葉の空無から生まれた、
「帰結を恐れず、ただ胡蝶として漂う」
不羈のプロメテウスの自由への空間。
死と言う絶対可能性空間への希望。

（定家の和歌の言葉は）

歌は、純粋持続とこの世の境界で妖しく浮遊している_koike

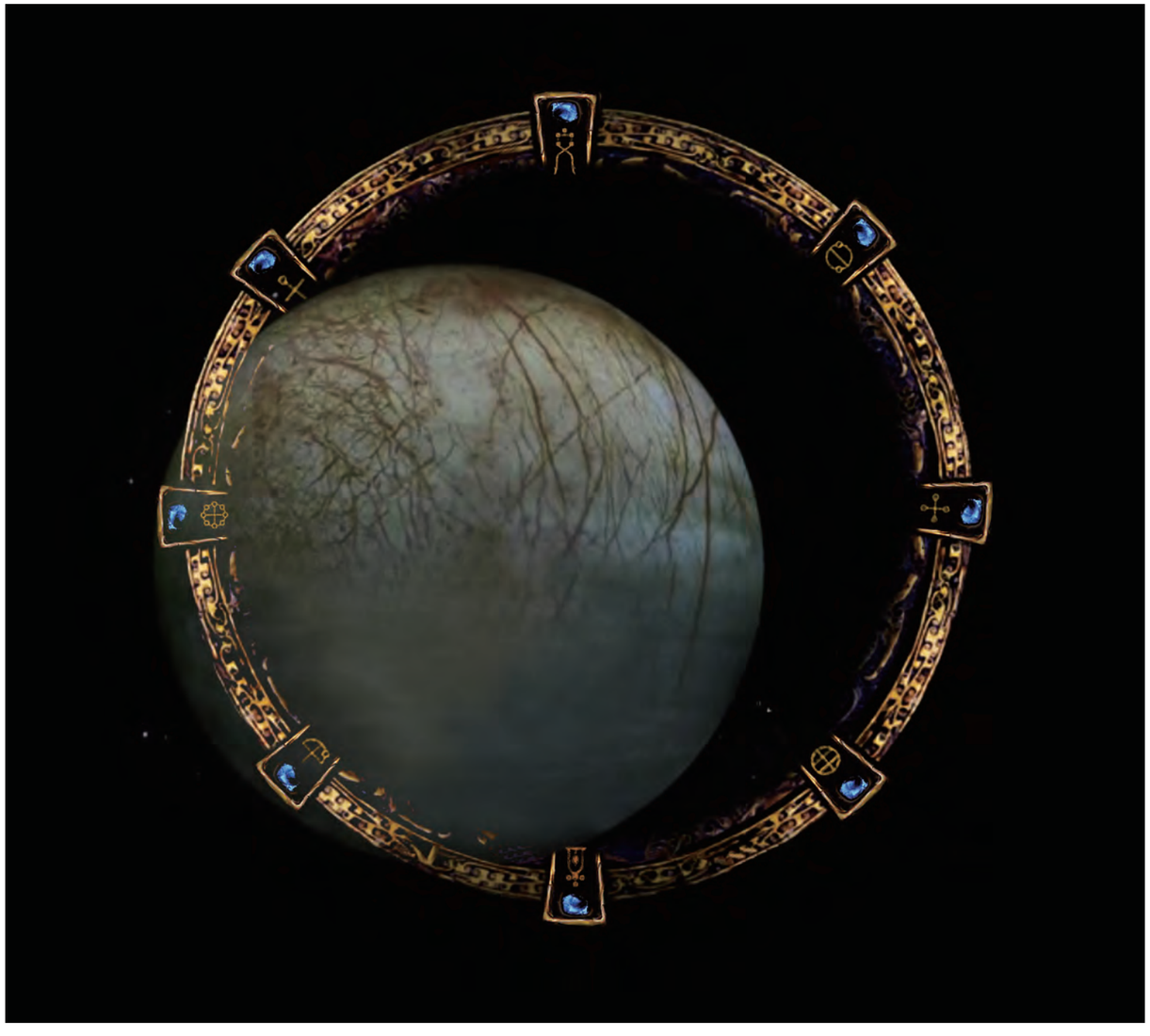


「新古今の叙景歌には、風景という＜物＞は何もない。
確乎とした手にふれる対象は何もない。
言語は必ず、対象を滅却させるように、
外部世界を融解させるように「現実」を
腐食するようにしか働かないのである。

それならこれらの叙景歌はどこに位置するか。
それは人間の内部世界と外部世界の境目のところに、
あやうく浮遊し漂っているというほかはない。
それは心象を映す鏡としての心象ではあるけれど、
何ら風景自体、心象自体ではないのである。
それならそういう異様に冷たい美的構図の本質は何だろうかと
云えば、言葉でしかない。
但し、抽象能力も捨て、肉感的な叫びも捨てたその言葉、
これらの純粋言語の中には、人間の魂の一等明晰な形式が
あらわれていると、彼らは信じていたにちがいない。」

三島由紀夫__「存在しないものの美学」

歌は 純粋持続の方からやってくる



「花ももみじもなかりけり」と言うのは純粋に
言語の魔法であって、現実の風景にはまさに荒涼たる灰色しかないのに、
言語は存在しないものの表象すらやはり存在を前提とするから、
この荒涼たるべき歌に、否応なしに
絢爛たる花や紅葉が出現してしまうのである。
ここには喪失が荘厳され、喪失が純粋言語の力によってのみ
蘇生せしめられ、回復される。

____帰るさの物とや人の詠むらん待つ夜ながらの有明の月____定家

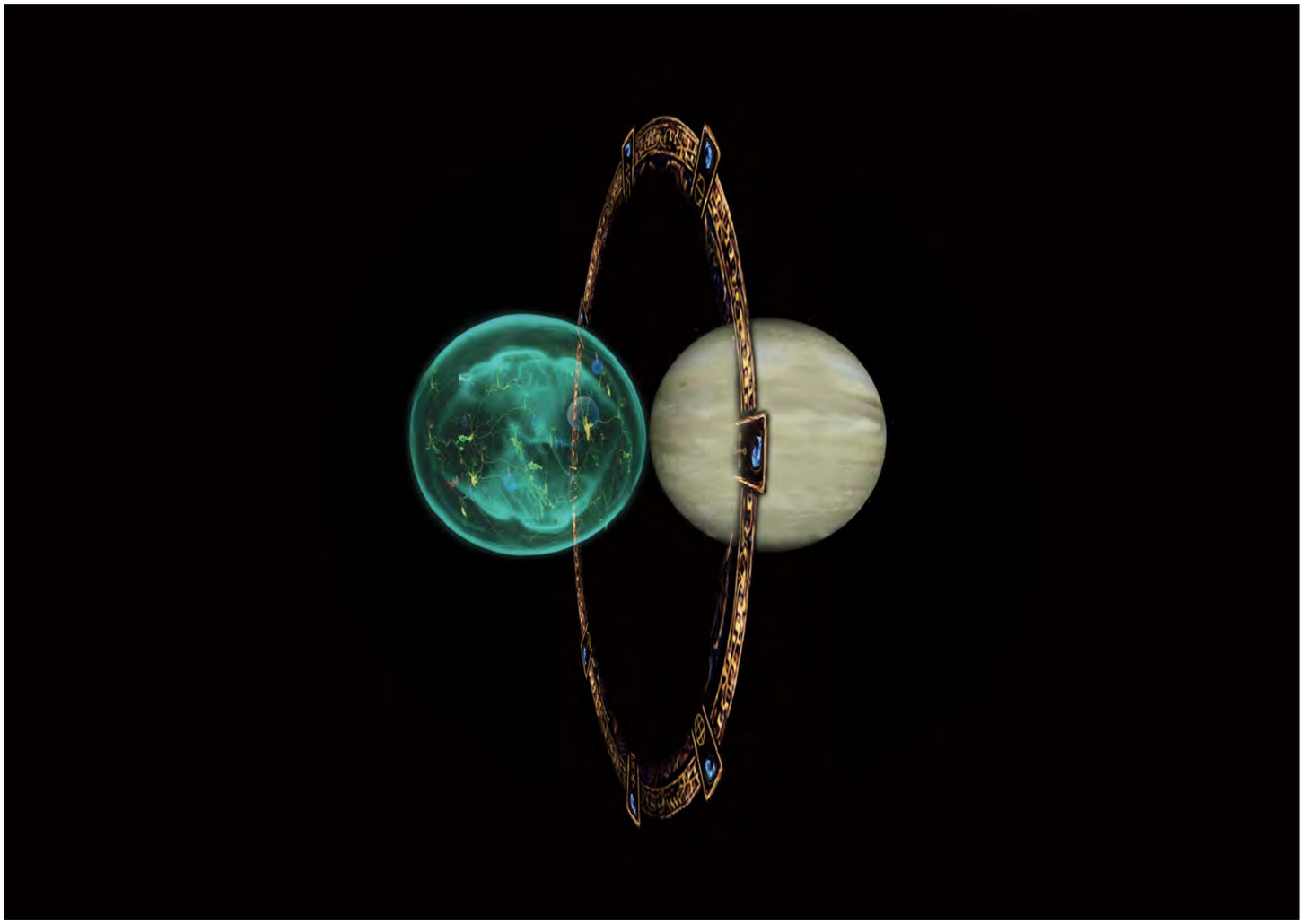
三島由紀夫__「存在しないものの美学」

非在、空無であることによって
それは荘厳を待っているのだ。koike

この世は、「言葉は、気味の悪い二重構造を持っている」

（定家の和歌の言葉は）

三島 由紀夫「存在しないものの美学」



言葉＿＿気味の悪い二重構造。

打ち捨てられた太古の火星の遺跡のような荒涼と

揺らめく花影の海が

重なって揺らめいて浮遊しているのが

言葉だ。＿koike

「花ももみじもなかりけり」と言うのは純粋に
言語の魔法であって、現実の風景にはまさに荒涼たる灰色しかないのに、
言語は存在しないものの表象すらやはり存在を前提とするから、
この荒涼たるべき歌に、否応なしに絢爛たる花や紅葉が出現してしまうのである。
* ここには喪失が荘厳され、喪失が純粋言語の力によってのみ蘇生せしめられ、回復される。

＿＿帰るさの物とや人の詠むらん待つ夜ながらの有明の月＿＿定家

ここには二ヶの月がある。
一方の月は、「待つ夜ながら」に眺められている。
もう一方の月は、「帰るさ」に眺められている。
前者の月は現実の月のようであり、後者の月は空想上観念上の月のように思われる。
しかし、実は後者の月こそ現実の月であって、前者の月は、正に目の前に見えてはいるが、
ありうべからざる異様な怪奇な月であり、
信じようにも信じることのできぬ怖ろしい月、正にそれ故に、歌に歌われねばならない月なのである。
なぜならその月は喪失の歴然たる証拠物件として出現しているからだ。

三島 由紀夫「存在しないものの美学」

ふたつの月と純粋持続。

金色の輪は、卑弥呼の神鏡の輪より採取。

「花ももみじもなかりけり」と言うのは純粋に
言語の魔法であって、現実の風景にはまさに荒涼たる灰色しかないのに、
言語は存在しないものの表象すらやはり存在を前提とするから、
この荒涼たるべき歌に、否応なしに絢爛たる花や紅葉が出現してしまうのである。
* ここには喪失が荘厳され、喪失が純粋言語の力によってのみ蘇生せしめられ、回復される。

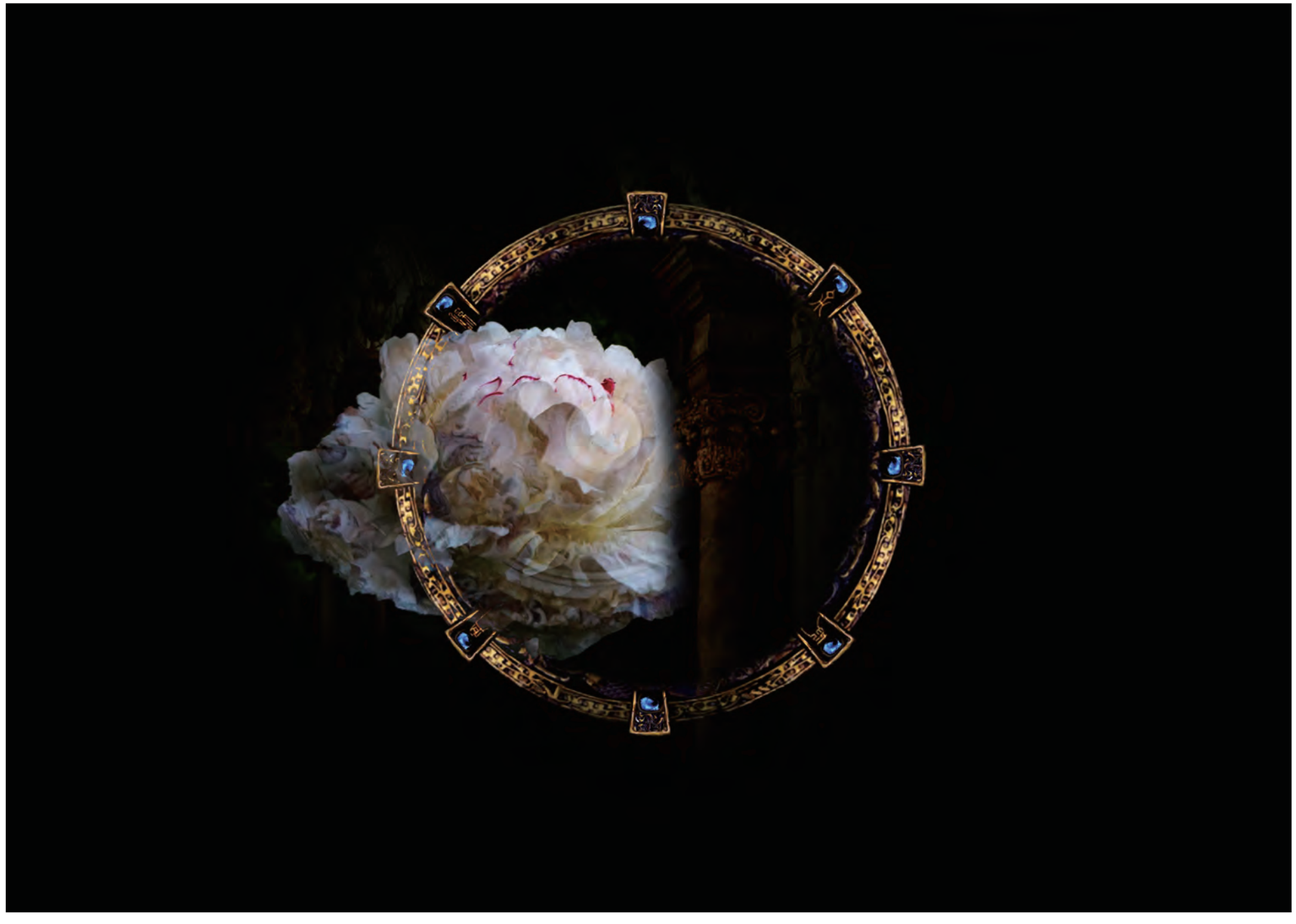
____帰るさの物とや人の詠むらん待つ夜ながらの有明の月____定家

ここには二ヶの月がある。
一方の月は、「待つ夜ながら」に眺められている。
もう一方の月は、「帰るさ」に眺められている。
前者の月は現実の月のようであり、後者の月は空想上観念上の月のように思われる。
しかし、実は後者の月こそ現実の月であって、前者の月は、正に目の前に見えてはいるが、
ありうべからざる異様な怪奇な月であり、
信じようにも信じることのできぬ怖ろしい月、正にそれ故に、歌に歌われねばならない月なのである。
なぜならその月は喪失の歴然たる証拠物件として出現しているからだ。

三島由紀夫 [存在しないものの美学]

durée pure__純粋持続

だから古今は、その哥の中核に”神への歩廊”を遺している。



『古今集の世界は、われわれがいわゆる「現実」に
接触しないように注意ぶかく構成された世界である。
プレシオジテがつねに現実とわれわれの間を遮断する。
それは日本におけるロココ的世界であり、
情念の一つ一つが絹で包まれているのである。』

__三島由紀夫　「古今集と新古今集」__

古今の言葉の規範だけで成り立っている世界は、
言葉の空無だけになった純粋な世界。
平面の重畳でできた、いわばこの世の奥行きや内奥を　奪われた世界。
言い換えると＜奥行き＞そのものと言える
だから古今は、その言葉の中核に”神への歩廊”を遺しているのだ。

____koike

存在しないものの美学__三島由紀夫の宇宙原理

___新古今集によせて__三島由紀夫

存在は言葉。
ふたつの極宇宙の逆接点に居る[言葉・わたし]は、
”奥行き”の宇宙が顕れるとき、
言葉の[死・不在]の作用で
領域を奪われ　存在は死ぬ。

しかしその死（虚軸）は
不在そのものとして
豊饒と自由となり　鏡像に絢爛を開闢する。

門であり　同時に意識非局所宇宙そのもの
でもある[不在・死の] 言葉のもつ妖しいこの機制は、
＜八咫の鏡＞と言える。

日本とは＜八咫の鏡＞の秘儀だ___三島由紀夫

言葉のこの形而上学こそ、
三島由紀夫の和歌の原理主義であり
未来紀への普遍原理__戦闘原理である。 _____koike

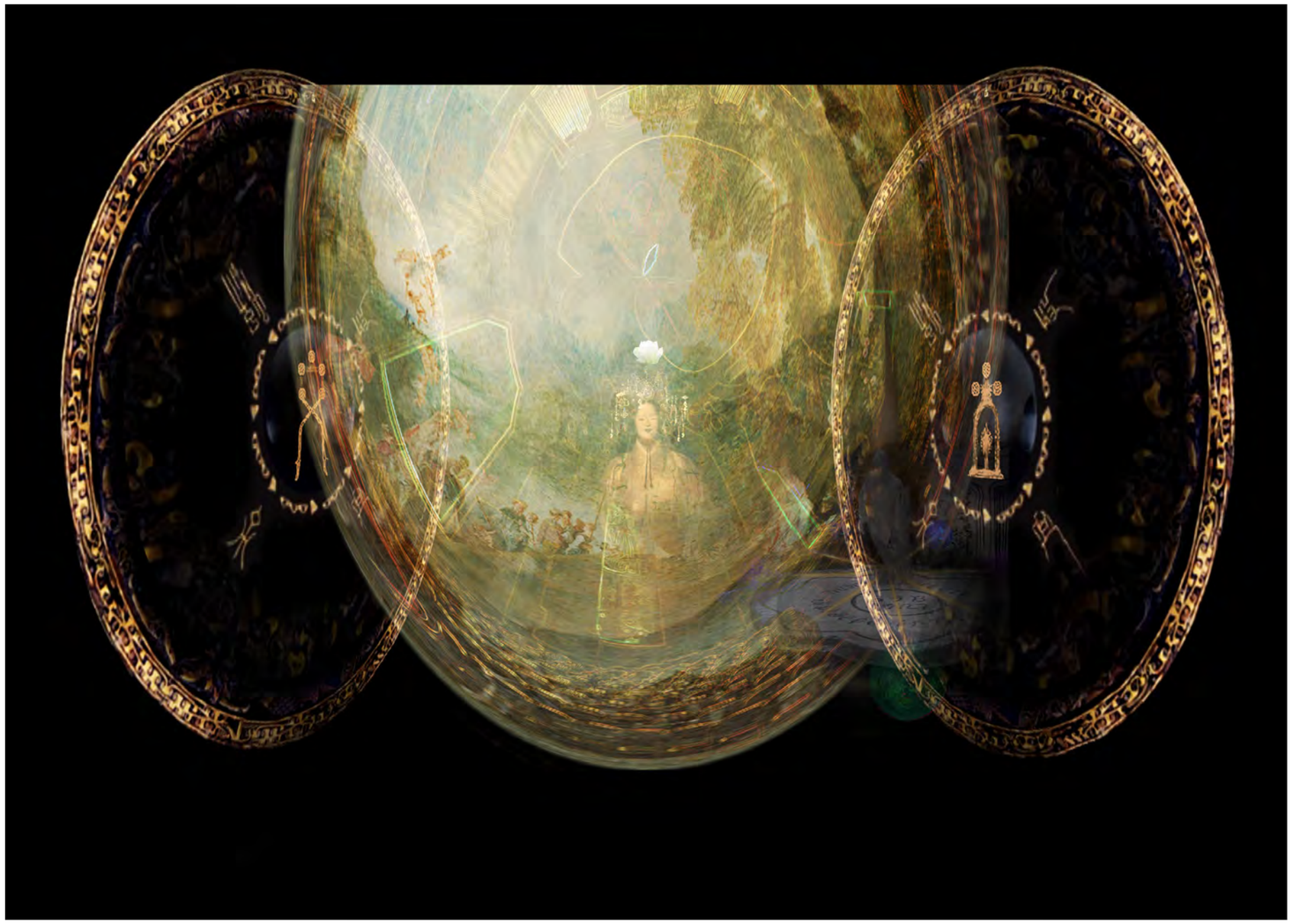
「私はもう＜古今＞の世界にしか帰ろうと思わなくなった...」___自決一ヶ月前の三島由紀夫の言葉

＊ヘーゲル.....「言葉は　存在物を名ざすことによって存在物からその存在を奪う」
＊モーリス・ブランショ.....「死は人間の可能性であり幸運であり、そのために我々は未来が残される。
死は人間の最大の希望であり、人間であるただ一つの希望である。」

＊三島由紀夫....「後送」
＊半田広宣.....「後送」

古今集の世界は、われわれがいわゆる「現実」に
接触しないように注意ぶかく構成された世界である。

___三島由紀夫　「古今集と新古今集」___



プレシオジテがつねに現実とわれわれの間を遮断する。
それは日本におけるロココ的世界であり、
情念の一つ一つが絹で包まれているのである。

___三島由紀夫　「古今集と新古今集」___

純粋持続の宇宙は、
われわれからは見ることも接触する
ことも出来ないように構成された
虚の反転を経た世界である。
ただ、その世界から暗示のように
漏れ出したイマージュから
それを伺うことができる。
それが「言葉」と言う次元を超えた
＜非在＞を本質とするものである。
そのもっとも純化したあり方が
＜古今＞の言葉の非在であり
その空虚を荘厳する純粋持続の美である。

___koike

＿外は 存在感情の海＿

風景は、＜外＞は、
ロココ化（秩序による美化＝外の主体化）によって
植物的存在感情の海となってたち顕われる。
それはみずからが対象環界の内部と
なってしまった反転の海だ。
我と汝は、植物的存在感情の海に溶けてしまう。
日本和語・和歌による未来のニンゲンの形式の一風景。
koike

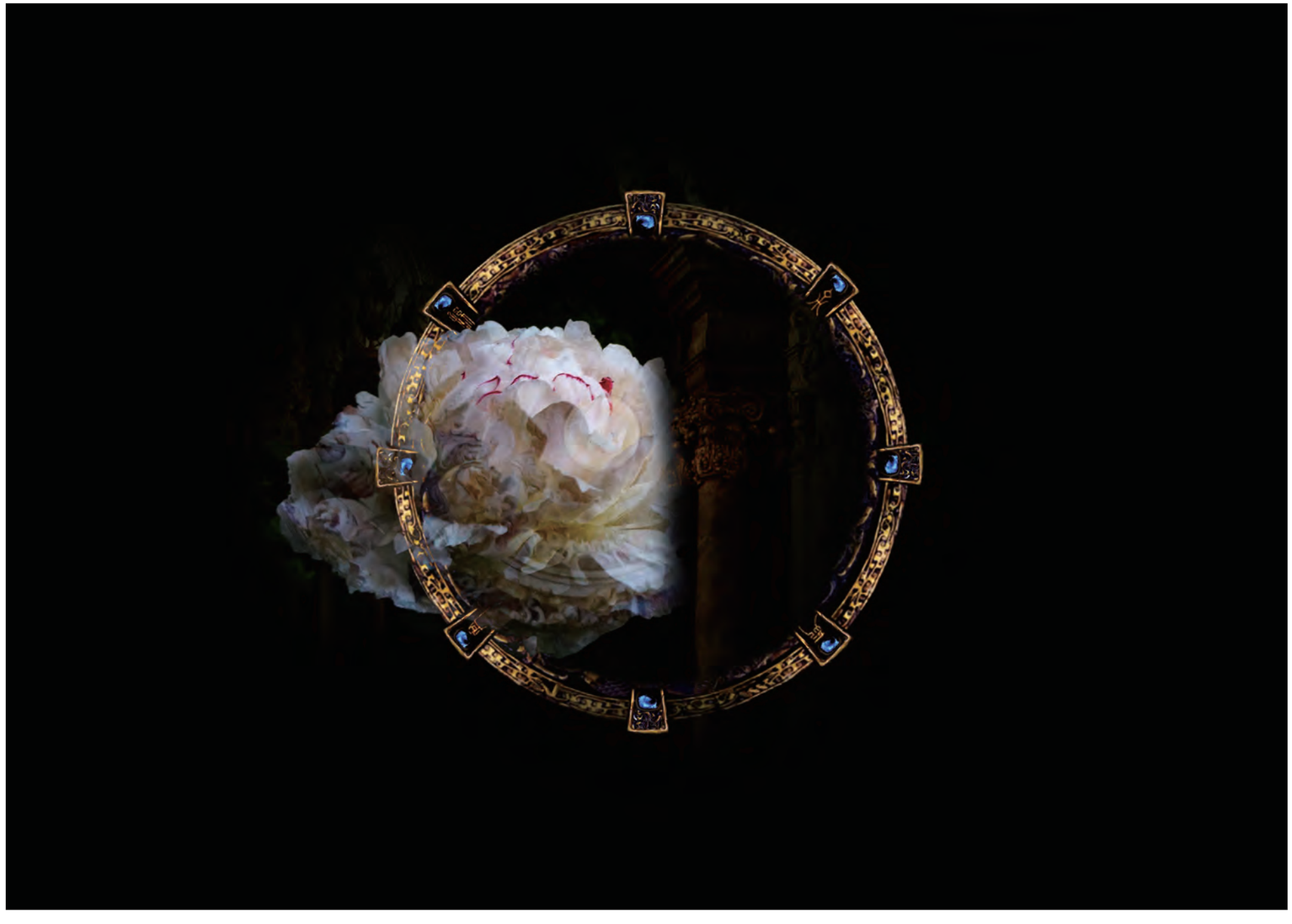
[古今、四季の歌では、抒景のはうに感情の「誠」がある。
整頓された自然ははじめて人間的なものになる。
抒景歌の感情の真実はそこにしかない。
この秩序の観念こそ「みやび」の本質である。
自然は隈無く擬人化されて、それ自体きはめて静かな
植物的な存在感情をもつに至る。
それは草木の誠であり、草木は王土に茂り、
歌に歌われることによつて「みやび」に参与をする。]

三島由紀夫＿「古今集と新古今集」より

からっぽであることは、全自然が
植物感情化し流入してくること。
日本とは空虚を本質としてる。
天皇とは伊勢とは、空虚の怪物である。式年遷宮。
＜遠＞を生きる植物[註1]。宇宙を植物化して呼び込む空虚の天皇。
それが＜みやび＞。*koike*

[註1]＿三木成夫

球体である“純粋持続”宇宙は、この世からは極限まで隔てられてある。
ベルグソン＿半田広宣
平面の私たちは視ることは出来ない。しかし、言葉の空無存在だけは
それをニンゲンに垣間見せてくれることもある。空虚の荘厳として。
それが＜古今＞の普遍の相。死の希望空間。人神の未来性への基礎。
Maurice Branchot
___koike



『古今集の世界は、われわれがいわゆる「現実」に
接触しないように注意ぶかく構成された世界である。
プレシオジテがつねに現実とわれわれの間を遮断する。
それは日本におけるロココ的世界であり、
情念の一つ一つが絹で包まれているのである。』
＿三島由紀夫　「古今集と新古今集」＿

純粋持続の宇宙は、
われわれからは見ることも接触する
ことも出来ないように構成された
虚の反転を経た世界である。
ただ、その世界から暗示のように
漏れ出したイマージュから
それを伺うことができる。
それが「言葉」と言う次元を超えた
＜非在＞を本質とするものである。
そのもっとも純化したあり方が
＜古今＞の言葉の非在であり
その空虚を荘厳する純粋持続の美である。
____koike